

辯護側

正

誤

表

文書第一九二四號 植村甲午郎供述書

第三頁、終ヨリ第四行「資源ノ統制運用」ノ次ニ以下ヲ挿入願ヒマス。  
「計畫ニ關シ調査立案等ヲ擔當セシムル目的ヲ以テ資源局ガ設立セラレ  
内閣總理大臣ノ管理ニ屬セシメラレマシタ。

資源局ノ事務ハ

- (1) 産業交通等ヲ初メトシテ資源統制運用ニ必要ナル調査
- (2) 資源統制運用計畫ノ立案及ビ之ニ關スル統制法規等ノ準備
- (3) 上記ニ關聯セル例ヘバ不足資源補填方策等ノ國內施設事項  
ノ三系統ニ大分セラレタノデアリマス。

此最後ノ項目デアル國內施設事項ト稱スルモノハ、國力充實ノ爲メニ  
必要トセラル、或特定ノ方策ヲ立案シテ各省ニ示シ其實現ヲ促進スルト  
云フコトデアリマシタ。

併シ資源局ハ内閣所屬ノ一小部局デアツテ各省ニ對スル特別ノ權限ガ  
ナイ結果各省ハ資源局ノ意思ヲ一應ノ參考トシテ聽キ置クト云フ位ノ程

度ニ終ツタノデ此方面ニテハ余リ實績ハ擧ラズ僅カニ日本ニ行ハル、工業用語ノ一部統一ヲ行ツタ位デシタ。

一方資源調査ノ方ハ昭和四年資源調査法ガ制定セラル、ニ及ビ之ニ基キ段々進捗シマシタ。又第二ノ資源ノ統制「一」ニ關スル計畫「ニ」ニ續ク。

極東國際軍事裁判所

亞米利加合衆國 其他

對

荒木貞夫 其他

宣誓供述書

供述者 植村 甲子郎

自分儀我國ニ行ハルル方式ニ從ヒ先ツ別紙ノ通り宣誓ヲ爲シタル上次ノ如ク供述致シマス

私、植村甲子郎ハ大正七年（一九一八年）帝國大學法科大學ヲ卒業後、直チニ農商務省商務局ニ奉職後、工場監督官、特許局事務兼、農商務大臣秘書官ヲ歷任シマシタ。

大正十四年（一九二五年）農商務省ヨリ商工省ガ分離設立セララルルニ際シ商工事務官兼商工書記官トナリ工務局ニ配屬サレマシタ。

大正十四年（一九二五年）産業事情調査ノ爲歐米ニ洋行シ同十五年歸朝シマシタ。次イデ昭和二年（一九二七年）内閣資源局創立ニ際シ同局ニ配屬セラレ調査課長ニ就任シ後庶務課長、更ニ總課部長ニ進ミマシタ。

昭和十二年（一九三七年）十月企劃院創立ニ際シ同院調査部長ヲ拜命、更ニ二十三年七月其ノ産業部長トナリ、十四年ノ機構改革ニ際シ産業部門ヲ所管スル企劃院第四部長トナリマシタ。

昭和十五年（一九四〇年）一月企劃院ノ次長トナリ十五年八月十三日辭職シマシタ。

## 企劃院設置ノ経緯

第一次歐洲戦争ノ經驗ニ徴シ、戦後歐米各國ハ何レモ産業動員ヲ初メ總動員ニ關スル調査研究ニ力ヲ致シテオルコトガ種々ノ調査ヤ報告ニヨリ明瞭トナリマシタノデ我國ニ於テモ、私ノ任官ノ翌年即チ大正八年内閣ニ軍需局ヲ設ケ大正七年制定ノ軍事工業動員法ノ施行ヲ初メ産業交通等ノ總動員準備事務ヲ管掌セシムルコトトナリマシタ。

其ノ後同局ハ内閣統計局ト合併シテ國勢院ガ設置セラレマシタガ後、同局ハ廢止セラレ其所管事務ハ各省ニ分屬セシメラレマシタ。

昭和二年ニ至リ單ニ軍需動員ニ限ラズ一般産業ノ振興、國富増進ニ關シテモ基本的調査ヲ爲シ之ニ基イテ計畫ヲ立テル必要ガアルト云フノデ凡テノ資源ノ統制運用ニ關スル計畫ニ付テハ陸海軍省初メ各省關係官ヲ會同シテ陸海軍省ヨリ提出セラレタ概略ノ戰時需要見込モ含メテ計畫ガ昭和四年頃カラ作成セラレマシタ。併シコレハ極メテ概略的ナ所謂机上案ノ域ヲ脱シマセンデシタ。

二然ルトコロ、昭和六年以後若槻、犬養、齋藤、岡田等ノ内閣時代ニハ國際  
狀勢ハ次第ニ悪化シ、日本ニハ農村不況ヲ中心トスル著シイ經濟不況ガ起  
リ此ノ爲ニ社會不安、政治不安ガ深刻トナリマシタノデ、政府トシテハカ  
カル狀勢ニ對應又ハ克服スル爲メニハ、内閣ニ一ツノ直屬ノ部局ヲ持チ重  
要ナル國策ニ付テハ之ニ充分調査ヲナサシムルト同時ニ各省ノ意見ヲ纏メ  
テ其國策ノ推進ヲナサシムル必要ヲ痛感シマシタ。

ソシテ此目的ノ爲メニ内閣調査局ガ設置セラレマシタ。コレハ昭和十年  
五月岡田内閣ノ時デアリマス。

此調査局ガ設立セラレタ後ハ資源局ニテ遂行不可能デアツタ政治、經濟ノ  
施設部面ハ、實質的ニハ同局ガ擔當スルコトニナリマシタ。併シ此調査  
局ハ昭和十二年五月企畫廳ニ改組セラレマシタ。

三昭和十二年七月ニ北支事變ガ突發スルヤ民間ニ於テハ前途ニ不案ヲ感ジ棉  
花其ノ他ヲ見越輸入ヲスル傾向ガ益々熾烈トナリマシタノデ之ヲ放置スレ  
バ從來ヨリ不足ヲ來タシテオツタ爲替資金ニ著シイ不足ヲ生ジ爲替相場ノ  
維持ヲ困難ナラシムル虞ガ増シテ來タノデ大藏省ニ於テハ輸入ヲ調整スル

爲ニ委員會ヲ設ケテ品目別ニ分科會ヲ置キ輸入ノ計畫ヲ樹テ輸入ノ調整ヲ行ハシメマシタ。

併シ事變ハ豫想ニ反シ、増々擴大スル一方ニテ政府トシテハ其事態ニ對處スル爲ニ各省ヲ通ズル綜合的ノ計畫、施設ノ必要ガ益々痛感セラレマシタノデ從來ノ企畫廳ト資源局ノ兩者ヲ合併シテ、ヨリ大規模ナ役所ヲ創立スル議ガ起リマシタ。當時ノ資源局幹部ノ考ヘトシテハ單ニ人員ノ增加位デ之ニ應ズレバ充分デノルト考ヘテキマシタガ政府ノ意向ニヨツテ兩者ハ合併セラレ昭和十二年十月企劃院ガ創設セラレマシタ。

企畫院ノ職務

四、企畫院ハ前述ノ如ク、資源局ト企畫廳トヲ合併シテ設立セラレタモノデアリマスカラ、其權限モ兩者ヲ合シタモノト實質上殆ンド同一デアリマシタ。其ノ主タル權限ハ總理大臣ノスタツフトシテ、綜合國力ノ擴充運用ニ關スル事項ニ付案ヲ立テ、總理大臣ニ上申シタリ、各省ヨリ提出スル案件ニ付テ、審査ノ上意見ヲ閣議ニ上申シタリ、一定ノ事項ニ付各省事務ノ調整ヲ統一ヲ圖ルコトデアリマシタ。併シ、企畫院ハ餉ク迄總理大臣ノスタツフトデアツテ各省大臣ニ命令シ、又ハ自ら實施スル權限ハナク、又其機能モアリマセンデシタ。國策ハ總テ閣議デ決定サレ、各省ガ其所管ニ應ジテ、之ヲ實施シタノデアリマス。

物資動員計畫

五、企畫院ガ手ヲ付ケタ第一ノ仕事ハ、曩ニ大藏省ノ委員會デ始メテ居タ輸入計畫ニ關スル業務ヲ引繼イデ、之ヲ含ム綜合的ナ物動計畫ヲ編成スルコトデアリマシタ。支那事變ノ進行ニツレテ物資ノ需要ハ加速度的ニ増大シ、爲替資金不足ノ面カラモ、物資不足ノ面カラモ一定ノ



計畫ニ基ク需給ノ調整ガ絶對的ニ必要トナツテ來タノデ、企畫院ハ創立早ク先ヅ從來ノ調査及計畫ヲ基礎トシ、陸海軍ヨリノ要求ト各省ヨリノ要求ヲ調整シテ綜合的ナ計畫ヲ立テマシタ。斯クシテ出來タノガ所謂物資動員計畫デアリマス。コレハ、昭和十二年度分ヨリ始メテ立テラレタノデアリマスガ、其十二年度分ハ年度半過ギテ着手サレタノト、支那事變ニ對處スル應急策トシテ急速ニ作成サレタ爲メニ極メテ粗雜ナ不完全ナモノデアリ、稍形ガ盛ツタノハ十三年度分カラデアリマス。

## 生産力擴充計畫

六、企畫院ニ與ヘラレタ物資關係ノ他ノ重要ナ仕事ハ生産力擴充計畫ノ樹立デアリマス。此生産力擴充計畫ハ物動計畫ヨリ遲レテ着手セラレマシタ。當時支那事變ノ擴大長期化ト國際狀勢ノ惡變ニ對處スル爲ニ止ムヲ得ザル手段トシテ軍備擴張ノ要求ガ強ク現ハレテオリマシタ。併シ、元來我國ノ基礎産業ノ發達ハ著シク列強ニ遅レテオリマシタノデ此基礎産業ヲ擴充シテ國力全般ノ向上ヲ圖ル必要ガ痛感セラレタノデアリマス。

生産力擴充計畫ニ付テ私が最初ニ關係シタノハ昭和十三年七月産業部長ニナツテカラデス、其當時ニハ各計畫ニ入ル個々ノ産業ニ付テノ草案ハ既ニ大半出來テオリマシタ。此等ハ企畫廳時代カラ研究セラレテキテ、産業部ニ於テハ其研究ヲ續ケテキタモノト聞キマシタ、私ノ産業部長ニナツタ時ニハ既ニ滿洲國ノ五箇年計畫モ十二年カラストトシテキマシタ我國トシテモ年次計畫ヲ設定スル必要ガアルト云フノデ既ニ出來テキタ草案ヲ基トシテ綜合調整ヲ行ヒ計畫ヲ設定スルニ至ツタノデス。トコロガ當初ハ日本ノ分モ五箇年計畫ト云フコトデアリ

マシタガ、滿洲國ノ計畫ト關聯シテ綜合的ニ立案スル必要ガアリマシ  
ノデ第二次計畫ヲ一齊ニスタートスル爲其終期ヲ滿洲國ノ計畫ト同シ  
カラシメ、從ツテ日本ノ計畫ハ四箇年計畫トナリマシタ。之ハ一方經  
濟上ノ條件ノ變動甚シキ時デモアリ此ノ點カラモ適當デアルト云フコ  
トデアリマシタ、又實際ニ内閣デ決定サレタノハ昭和十四年ノ一月デ  
アツタノデ、昭和十三年度ハ剩ス所三箇月トナリ實質的ニハ三箇年計  
畫トナツタノデアリマス。計畫ノ中ニハ全部ガ網羅サレテオルワケデ  
ハナク、前述ノ通り第一次ガ終レバ第二次ノ計畫ヲ設定スル豫定デア  
リマシタ。

物動計畫ニ於テ生産擴充ニ對スル資材ノ割當ハ直接軍需資材ノ割當ノ  
減少ヲ意味シ、企畫院ハ爾來毎年物動計畫ノ立案ニ際シ陸海軍ト他ノ  
各省トノ間ノ要求ノ調節ヲナス任務ヲ有シテオリマシタ。卒直ニ言ヘ  
バ元々企畫院ガ生産擴充計畫ヲ獨立シタ所以ハ前述ノ通り我國ノ産業  
ノ均衡ノ採レタ發達ヲ冀求スル所ニ在ツタノデ企畫院トシテハ生産力  
擴充ニ對スル資材割當ヲ確保スベク非常ニ努力シマシタ。

併シ支那事變ノ發展ニ伴フ軍需増加ノ爲メ生産擴充ニ對スル資材ノ割當ハ企畫院ノ期待通りニ行カズ、從ツテ、生産擴充計畫ノ如クニハ行ハレマセンデシタ。

計畫年度ト云フノハ物動ノ計畫中豫算トノ關連上、當然會計年度ヲ採用シタノデアリマス。從ツテ此生産力擴充四々年計畫ノ最終年度ハ昭和十六年四月ニ始まり昭和十七年三月末日ニ終了スルノデアリマス。セ、又此ノ生産力擴充計畫ニ付テハ當然陸軍省ニ於テ、十分研究サレタモノト考ヘマスガ、本東京裁判ニ於テ問題トナツテ居ル昭和十二年六月二十三日陸軍省軍需品製造五箇年計畫要綱竝ニ同年五月二十九日ノ重工業五箇年計畫要綱ト云フモノガアツタコトハ全然知リマセン。

## 國家總動員法

八、企畫院ニ於テ關係シタ事項中重要ナモノノ一ツハ國家總動員法デアリマス。國家總動員法ハ支那事變ノ勃發後昭和十二年十一月九日閣議デ決定サレ七十三議會デ成立シ昭和十三年五月五日ヨリ施行セラレマシタ。當時ノ企畫院總裁ハ龍正雄氏デアリマシタガ、其制定ニ關スル閣議ノ決定ガアツク後企畫院ハ近衛首相ヨリ各省ト協力ノ上總動員法ヲ制定セヨトノ命ヲ受ケ關係各省ト度々ノ交渉ニヨツテ立案ノ事務ヲ擔當シマシタカクシテ出來上ツタ法案ハ更ニ國議ニヨツテ正式ニ認めラレ議會ニハ各省大臣ノ連名ノ形式ニテ提案セラレタト記憶シテオリマス。當時總動員ニ關スル法律トシテハ大正七年ニ制定セラレタ軍需工業動員法ガ尙效力ヲ有シテオリ鐵工業交通等ノ部門ニ付テハ相當廣範圍ニ適用シ得ル規定ヲ含ンデオリマシタノデ取り敢ヘズ支那事變ノ進展ニ對處スル爲メニ昭和十二年九月十日附ノ法律第八八號ヲ以テ此軍需工業動員法ヲ適用シ更ニ同月二十五日同法ニ基ク工業事業管理令ト稱スル勅令ヲ制

定シ、一部ノ軍需工場ヲ管理スルコトニナリマシタ。其他當時ノ第七十二帝國議會ニ於テハ、支那專横ニヨツテ來ヒラレタ事情ノ變化ニ對スル應急措置トシテ多數ノ臨時措置法ガ制定實施ヒラレマシタ。併シ支那專横ハ益々擴大シ遂ニ長期化ノ傾向ガ顯ハレテ來マシタ又國際關係モ段々惡化シテ如何ナル不測ノ事態ガ起ラヌトモ限ラヌ状態ニナリマシタ。新クノ如キ状態ニ對シテ遺憾ナキ措置ヲ採リ得ル爲メニハ約二十年前ニ制定ヒラレタ軍需工業動員法ヤ個々ノ臨時措置法デハ到底充分デナカツタノト國家總動員ノ體制準備トシテハ日本ハ世界各國ニ遅レテオリマシタ人デ至急ニ總動員法ヲ制定スルコトニナツタノデアリマス。當時戰々ハ、英國ノ統一國防法ノ如キ前大戰當時ノ歐米各國ノ法規及其後ノ立法例ヘバ伊太利國家總動員法チエツコスロバキヤ國家總動員法、北米合衆國國家總動員法案ヘ一九三五年第七十四議會下院提出議案第五五二九號當時上院ニテ審議中ノモノ一テ入手スルコトガ出來マシタノデ、是等ヲ參考トシテ總動員法ノ立案チシマシタ。就中チエツコスロバキアノ動

員法ト北米ノ法案ハ最モ勝レタモノデ非常ニ参考ニナツタト記憶シマス  
新クシテ制定セラレタ日本ノ國家總動員法ハ昭和十三年五月カラ實施サ  
レマシタガ此實施ト同時ニ軍需工業總動員法ハ廢止セラレマシタ。

九、其後此總動員法ニ甚ク多數ノ勅令ガ發布セラレマシタガ、前述ノ如ク企  
畫院ハ政府ノ政策實施ニ關スル權限ヲ全ク有タナカツタノデ是等ノ勅令  
ハ專ラ其實施ノ權限ヲ有スル各省自身ガ提案シ其實施ニ當リマシタ。

Def. Doc 1924

昭和二十二年（一九四七年）七月二十五日

於東京都澁谷區千駄ヶ谷  
三丁目四九六

供述者

植村 甲子郎

右ハ當立會人ノ面前ニテ宣誓シ且ツ署名捺印シタルコトヲ證明シマス。

同日於

立會人 右田 政夫



宣  
誓  
書

良心ニ従ヒ眞實ヲ述ベ何事ヲモ黙秘ヒズ又何事ヲモ附加ヒザルコトヲ誓フ

署名捺印

植  
村  
甲  
子  
郎